

角田光代『対岸の彼女』論

——女性たちのエンパワーメント——

光 石 亜由美

1. はじめに——角田光代『対岸の彼女』について

角田光代の作品は、結婚、家族、友情など女性の日常性に寄り添った物語世界を描きながら、かつ現実社会の問題に切り込む視点をもつ。本稿で論じる『対岸の彼女』も、女性同士の友情、専業主婦の就労問題、待機児童問題など、女性を取り巻く問題を扱っている。

『対岸の彼女』は、二〇〇三年一月から翌年七月まで、『別冊文藝春秋』に連載され、二〇〇四年一月に単行本化されたのち、二〇〇五年一月、第一三二回直木賞を受賞した。漫画化（安孫子三和作画、白泉社「Jens comics」、二〇〇五年九月）、テレビドラマ化（WOWWOW、二〇〇六年一月一五日、主演＝夏川結衣、財前直見）もされた。また英語、フランス語にも翻訳されている。二〇一七年二月には登場人物の一人であるナナコのその後を描いたスピントフ小説「私の灯台」も発表された（『「ナナコ」一服ひろば』）。

榎本正樹は『対岸の彼女』は、夫婦小説であり、育児小説であり、家族小説であり、個人史をめぐる小説であるのだが、結婚という制度の自明性を疑ったり、育児や家事に非協力的で妻の仕事を見

下す夫の無理解を日常の視点から暴き立てるフェミニズム的な文脈を含みつつ、その先、さえをも示唆する野心に満ちている」と、フェミニズムの小説として高く評価する¹⁾。

また、野崎敏は書評において、「そもそも友情はいつまでその力を保てるものなのか」という問題を描き出そうとした小説として評価する²⁾。他にも、バブル世代の問い直しとして読む大杉重男³⁾や、独身女性と専業主婦を隔てる障壁を乗り越える物語として読む森絵都⁴⁾など、友情、家族、労働など女性をめぐるさまざまな問題が複層的に描かれている作品として評価されている。

直木賞を受賞するなど高い評価を得ている『対岸の彼女』であるが、この作品単独で扱った先行論文はほとんどない。本稿では、育児小説、夫婦小説、家族小説、友情小説など様々な角度から読むことのできる『対岸の彼女』を、まず、小夜子を中心に子供をもった母親が働く（ワーキング・マザー小説）として読み、育児をしながらの就労の難しさを現実社会のしくみ、ジェンダーと労働の問題として捉えて考えてゆく。次に、構成と語り注目しつつ、ナナコ・葵／小夜子・葵の物語として読む。単なる友情の物語ではなく、「独身女性」と「主婦」の起業の可能性をそこに見出し、女性間のエン

パワーメントの物語として新たに位置づけてゆきたい。ここでの「エンパワーメント」とは、北野誠一の定義を借りて、「自分らしく人間らしく共に生きる価値と力を高めること」⁵⁾としておく。

2. 〈ワーキング・マザー小説〉としての『対岸の彼女』

——小夜子の物語

田村小夜子は五年前に結婚退社して、娘あかりを育てる専業主婦である。小夜子が働き始めようと思ったのは一枚のブラウスがきっかけだ。一枚「一万五千八百円」のブラウスを手に取ったとき、これが高いのか安いのかわからなかった。「そもそも自分と同年の女性にとって、ブラウスの相場とはどのくらいなのか」——このエピソードは、女性は主婦になると家事や育児に追われ、現実社会から切り離され、家庭という場に閉じ込められてしまうことを物語っている。公園デビューもできず、人見知りするあかりのことも心配で、自らが働きに出れば、あかりも変わるのではないか。そうした思いから働くことを決心する。プラチナ・プラネットという、本業は旅行会社だが、清掃作業も行っている会社に面接に行くと、偶然、社長の植橋葵が同じ大学出身であったことから、雇用が決まり、清掃業の研修を受けることになる。

しかし、夫の修二は小夜子の就業に否定的で、小夜子の業務が清掃業務だと聞くと、「なんだ、お掃除おばさんってわけか」と「馬鹿にしている」口調で言う。本格的に働き始めると、帰りが遅くなり、食事の準備、あかりの世話に追われる小夜子は、つい夫にきつく当たってしまう。そんな小夜子に対して、修二は「働くのは悪い

ことじゃないけど、無理をして働くことはないんじゃないかな」という。「おまえがいないことで支障が出るような仕事じゃないんだろ？ いったん休んで、もつとゆつくり仕事捜して、それで前みたいに意味のある仕事を見つけたらどうかってさ」と小夜子に言う修二は、ある意味、女性の就労に否定的な男性ジェンダーの偏見を表している。

「なんだ、お掃除おばさんってわけか」という修二の軽口の背後には、労働をめぐるジェンダー格差の問題が反映されている。サラリーマンの修二にとって清掃業というのは一段低く見られている。なぜなら、女性が多く従事する介護、清掃等は家事の延長としてみなされ、低く評価されがちだからである。また、賃金も低いのが現状である。サラリーマンは、男性の仕事の代表格で、やりがいのある仕事だから相応の対価の賃金をもらえる、という図式に対して、清掃業は家事の延長で、片手間にやる仕事、ゆえに賃金は低いという構図である。本来ならサラリーマンも清掃業も職業としては等価であるはずなのに、労働にジェンダーイメージがもたらされると、介護、清掃などの女性の家事の延長とみなされる仕事は低評価、低賃金なのだ。

また、「おまえがいないことで支障が出るような仕事じゃないんだろ？ いったん休んで、もつとゆつくり仕事捜して、それで前みたいに意味のある仕事を見つけたらどうかってさ」という修二の言葉の背景には、女性の労働は代替可能であるという偏見が透けて見える。この発想は多くの女性がパート労働、派遣労働に従事せざるをえないという現状を反映している。

『対岸の彼女』が発表された二〇〇三年の、女性の年齢階級別労

働力率を見ると、二五〜二九歳が就労のピークで七三・四%、そこからなだらかに落ち込み、再度上昇し七〇%台に持ち直すのが四〇代になってからである（厚生労働省「平成一五年版働く女性の实情」）。このように女性の年齢階級別労働力率がM字型曲線構造を描くのは、多くの女性が結婚・出産によって離職するからである。また、育児から手が離れ復職しても、パート労働や非正規雇用の場合が多い。既婚女性がなかなか正規採用の職に戻れないのは、男性は労働、女性は家事育児という性別役割分業の意識のほかにも、労働要員として女性は代替可能であるという産業構造がある。

また、修二の母親（小夜子にとって義母）も、息子の嫁の就労をよく思わない。「ねえ小夜子さん、本当に働くの？修二のお給料じゃそんなに足りない？」と小夜子を非難する義母は、小夜子が働きたいというのは息子の給料だけでは家計を賄えないという小夜子の不満からだと言推す。小夜子が無理して働くこうとするのは、息子の甲斐性のなさへの小夜子の暗黙の非難だと義母には感じられるのである。こうした義母の思考の背景には、主婦は夫の稼ぎで家を切り盛りするという専業主婦としての矜持があるのだろう。男性は働き、女性は家を守るという性別役割分業を内面化した義母にとって、小夜子の就労は理解しがたいものである。

さらに、義母が囚われているのは育児における三歳児神話である。孫のあかりを預かることを承諾していた義母であるが、いざ預かる段になると、「私は子どもたちが帰ってくるとき家にいない母親にはなりたくなかった、子どもにさみしい思いをさせてまで働く人の気が知れない」と小夜子に嫌味を言う。

三歳児神話とは、「子どもは三歳までは、常時家庭において母親

の手で育てないと、子どものその後の成長に悪影響を及ぼす」という考え方である。欧米の母子研究の影響を受けた三歳児神話が広まったのは、一九六〇年代から七〇年代の高度経済成長期であるという⁷⁾。おそらく義母はこうした専業主婦の母親が子育てするの⁸⁾が、子どもの生育にとって一番いいという育児理念を内面化した世代であると思われる。

さらにこうした三歳児神話を夫の修二も口にする。「ほら、三歳になるまで、どれだけ母親と一緒にいられたかで、その後の性格形成がだいぶ違ってくるんだろ？（中略）働くのはあかりがもう少し大きくなってからでもいいんじゃないの。人んち掃除するのでもいいけど、それでうちのおぎざりになるんだつたら意味ないんじゃないかなあ」——三歳児神話を盾に小夜子の就労に対して苦言を呈する修二であるが、外で働く家事がおぎざりになるとい言葉の背後には、性別役割分業を自明視する家父長制的発想に修二がとらわれていることがわかる。専業主婦による育児を推奨する三歳児神話は、「女性を主婦役割に回収する装置」⁹⁾ともなるのだ。

専業主婦として女性が家事育児をすることをあたりまえのこととして疑わない義母と、小夜子の世代間の壁は明らかである。「対岸の彼女」が発表された二〇〇三年を物語の時間とすると、三五歳の小夜子は一九六八年生まれということになる。修二も同年代だとすると、修二の母親は高度経済成長期に結婚し、子育てをした世代ということになる。

日本において「主婦」が誕生したのは、大正時代、特に第一次大戦後だといわれるが、その多くが当時、数が少ない会社員や教師、官吏などの「新中間層」であった。女性の多くが「主婦化」してゆ

くのは、戦後の高度経済成長期である。経済成長とともにサラリーマン家庭が増え、男性は働き、女性は家事・育児という性別役割分業に基づいた家族形態が一般化し、「専業主婦」が増加する。それが、「一般的」な女性のライフ・モデルとなったのだ⁵⁵。義母も高度経済成長期の「専業主婦」の一人であろう。

専業主婦である母親に育てられた修二も、一家の主である自分が働き、小夜子は家を守るという戦後高度経済成長期の家族規範を生きており、小夜子が働きたいと思う気持ちを理解できないのである。

一方、大学卒業後、映画配給会社に就職した小夜子は、募集・採用・配置・昇進において女性を男性と均等に取り扱うことを努力義務とした「男女雇用機会均等法」制定（一九八五年）後に就職した世代である。女性も男性と同等に働くことができるという意識をもって就職した世代である。小夜子は結婚退職しているが、積極的に専業主婦になろうとしたわけではなく、職場の「微妙な対立」になじみず、結婚退職という道を消極的に選択したのだ。

このように『対岸の彼女』は高度経済成長期の「専業主婦」である義母、男女雇用機会均等法以後の小夜子、そして、自ら会社を立ち上げて働く独身キャリア・ウーマンの葵という、異なる女性のライフコースを描き出しているという意味でも、〈女性と労働〉がテーマの主軸である。

さて、いざ、就労が決まっても、次に待っているのはあかりを預ける保育園を探す困難である。

認可保育園に入るのは大変だと、知り合いの主婦から聞かされてもいたし、雑誌で読んだこともあったのだが、人ごとのように思っていた。（中略）しかし第一希望の保育園は、入園希望

児童が十人近く待機していると言われ面食らった。待機人数に違いはあったが、すぐに入園できるところはまったくなかった。

『対岸の彼女』は二〇〇三年の発表だが、現在も待機児童問題をめぐる状況はあまり変わっていない。

専業主婦であった小夜子が育児をしながら働くことを阻害する原因としては、これまで見てきたような性別役割分業や三歳児神話にとらわれた夫や義母の無理解、そして待機児童問題など社会や政治の壁であるが、小夜子の就労を阻害するのはそれだけではない。次に述べるように、母親である小夜子本人の中にある労働と育児のトラウマ、育児からの逃避としての労働など、小夜子自身の中にも自身の就労を阻害する要因があるのだ。

小夜子が働こうと思ったのは決して積極的な意志からではない。面接の際も、「働きたい、ではなくて、働かなきゃならないんだと、心のなかでは言っていた。あかりのために、母親である自分のために」と心の中で思う。

小夜子にとって、この時点で働くことは、「働きたい」ではなく、「働かなきゃならない」であり、働くようになれば、あかりを連れて「公園にいかなくていい」のだ——つまり、ワンオペ育児に行き詰まり、ママたちの人間関係にも疲れていた小夜子にとって労働とは、育児そのものや育児をめぐる人間関係のわずらわしさから逃避する手段でしかなかったともいえる。

また、保育園にあかりを預けることができ、仕事で覚えることも増え、仕事にやりがいを見つけ出した小夜子だが、あかりを預けてまで仕事することに逡巡することもある。

保育園に通いはじめてから十日が過ぎていたのに、おうちにいたいと今日も泣いたあかりが思い出される。自転車に取りつめた補助椅子で、空を仰ぐようにして泣いたあかりのちいさな頭が思い浮かぶ。働くことにもう迷いはないものの、そんなふうに泣くを見るたびに、胸がふさがれる思いがする。

この場面には、働く母親が抱える育児と労働のトラウマが表れている。育児が母親のみの仕事と見なされている限り、育児と労働を両立させることは困難だ。子供への負い目を母親のみが感じなければならぬ背景には、男性の育児参加率の低さ、保育園などの施設の不足などさまざまな要因がある。

このように育児と労働の両立に逡巡する小夜子であるが、清掃の仕事をつかきかけに徐々に人間関係が築けるようになる。また、あかりを自転車に乗せて保育園に送り迎えするようになる。自分と同じように働きながら育児をしている母親がいることに気づく。「チーちゃんママは介護関係、レンくんママは生命保険会社、タッキーママはフリーランスで翻訳をしている。よく顔を合わせる彼女たちに笑顔で答えながら、彼女たちもみんな、こんちくしょうとかけ声をかけながら自転車を走らせてくるのだろうか」と小夜子は思う——「こんちくしょう」と言いながら、自転車のペダルを踏むことで、育児と労働の両立の困難さを乗り越えてゆこうとする女たちの連帯が読み取れる場面である。

また、育児と労働の両立に困難を感じながらも、一歩一歩前に進んでゆく小夜子は、夫の嫌味を無視できたり、反論できたりするようにもなる。小夜子は働くことによって、自分と、自分の周囲も変えてゆくのだ。

このように、ワンオペ育児から逃れるために働きた小夜子は、仲間とともに働くことで、また自分の周囲に働く母親がいることに気づくことで、育児と労働のトラウマ（子供を置いてまで働くことの罪悪感）を乗り越えてゆく。それだけではない。「ねえ、あかりが変わったこと、わかっている？ちゃんと見てる？最近はお友だちができて、おしゃべりもずいぶんできるようになったと思わない？」と夫に問いかける小夜子は、変わったのは「あかりだけじゃない、私だってそうだ」と思う。母親が働くことによって、母親も子供も変わることができるという確信を得るのだ。

『対岸の彼女』は、夫や義母の無理解、子供を持つ女性が働くことを困難にさせる社会的要因を背景に、小夜子という母親が働くことに意味を見つけ出すまでを描いている。小夜子にとつての労働とは、それまで人間関係から距離を置いていた自分を変化させることであり、それは周囲の人間（子供、夫）を変えることでもあり、同じ子どもを持ちながら働く女性たちとの連帯感を築くことだった。「公園巡りで鬱々としていた自分」が、「何かを変えたいと思い、腰をあげ、何もなしどころから参加し、女たちと意見を言い合い、試行錯誤をくりかえしながら、少しずつ掃除業務をかたちにしようとしている」という自信を得る。そして、その労働とは「だれかと取り替えがきくとかきかないとか、そういうことは遠く隔たった」ものであると思いついた。夫から「お掃除おばさん」と見下されていた清掃という仕事は、「だれかと取り替えがきくとかきかないとか」という代替可能なレベルのものではなく、小夜子によって（自分がやる仕事）としての意義が与えられる。

このように働く意味を見出してゆく小夜子であるが、この物語で

もう一つ「労働」が重要な意味を持つのが、物語の最後、葵の部屋の「掃除」をする場面である。『対岸の彼女』の隠れたモチーフの一つは「掃除」という労働である。夫には「お掃除おばさん」と馬鹿にされながらも、清掃業に意味を見出す小夜子、そして、葵とナノコの過去の回想場面では、二人が夏休みにペンションで掃除業務のアルバイトをする。最後に、葵と小夜子を結びつけるのも「掃除」である。

『対岸の彼女』における「掃除」の役割を見てゆく前に、もう一つの物語の軸である葵とナノコの過去の回想場面を見てゆこう。

3. 〈エンパワーメント小説〉としての『対岸の彼女』

—— ナノコと葵／小夜子と葵の物語

これまで、『対岸の彼女』を〈ワーキング・マザー小説〉として、小夜子を中心に読んできたが、これは物語の半分である。物語は、小夜子が葵という社長に出会い、それまでの自分を変化させてゆく小夜子のパート（奇数章）と、高校時代の葵とナノコのパート（偶数章）で構成されている。時間も場所も異なっている話が同時並行で語られる。また、現在の葵の積極的かつ楽天的な性格のまま、偶数章＝葵の過去のパートを読むと、その違いに読者はとまどうだろう。いじめられ、人間とかかわりを持つことを恐れる過去の葵は、小夜子の姿そのものだ。読者は、なぜ、人間関係に臆病だった葵が変わったのか、またナノコとの間に何があったのか、という興味をもって読み進めるといふ謎解きの要素も加わっている。

これは仮説なのだが、書き手は、現在の小夜子と過去の葵が、あ

たかも同一人物のように読めるように仕掛けているのではないか。つまり、現在の小夜子と過去の葵を混同させる語り方をあえて採用しているのだ。

角田光代は物語構成のうまい作家である。例えば、『八日目の蟬』では、誘拐犯である希和子が、誘拐した赤ん坊・薫を育てるといふ物語を、希和子と薫（本当の名前は恵理菜）の双方から語るといふ構成をとっている。そして、希和子の逃亡の地であった小豆島で希和子と恵理菜がお互いを認識しないまま遭遇するというラストを迎える。二人の視点から語ることで、お互いがそれぞれ過去のトラウマを乗り越える物語となっている¹⁰⁾。

『対岸の彼女』の構成のうまさ、直木賞の選評でも触れられている¹¹⁾。また、榎本正樹も『対岸の彼女』においても、奇数と偶数の短章をそれぞれの人物の視点でとらえていくコントラストイヴな手法が踏襲されている。（中略）この作品では偶数章で語られていく葵の高校時代の親友野口魚子をめぐる葵の個人史が、過去と現在を取り結ぶもうひとつの「対岸」として物語を多重化している」と評価する¹²⁾。

もう少し詳しく『対岸の彼女』の構成と語り方を説明してみよう。まず、章の構成であるが、これは前述したように、奇数章で小夜子の視点から現在の物語が語られ、偶数章では、高校時代の葵とナノコの過去が葵の視点で語られる。単に小夜子と葵の物語が交互に語られるだけではない。小夜子と葵の物語、葵とナノコはパラレルに描かれている。つまり、過去の葵の回想部分を読んでいると、葵の過去は、小夜子の過去であるかのような錯覚を覚えるのだ。

どのように葵の過去と小夜子の現在がシンクロするのか。具体的

な例でみてみよう。高校生だった葵は横浜に住んでいたが、高校でのいじめが原因で不登校になる。母親の実家がある群馬に引越すが、そこでナナコという不思議な少女と出会う。ナナコはクラスの仲間の輪に入らず、独自の世界に生きているように見える。そんなナナコにひそかに共感する葵は、ナナコと親密になり、ある夏、伊豆のペンションで一緒にアルバイトをする。アルバイトの最終日、

バイト代を手にして帰途に就くため駅で電車を待つが、ナナコは電車に乗ろうとはせず、「アオちゃん、あたし帰りたくない、帰りたくない、帰りたくない、帰りたくない、帰りたくない、帰りたくない」と繰り返す。ナナコの家は貧乏で、彼女もいじめにあっていたのだ。二人は家出を決意する。「あたし、ナナコと一緒にだとなんでもできるような気がする」とナナコに告げる葵。しかし、お金も尽き、かつて葵をいじめていたクラスメートを恐喝し七千円を手に入れた、葵が住んでいたアパートの屋上に行く。「もつとずっと遠くにいきたいね」という葵に対して、ナナコは「無表情な声」で「ここから、手つないでいっせいのせで飛んでみようか」という。おそろく、すさんだ家庭環境、学校でのいじめによって心に「空洞」を抱えていたナナコは、自殺をするつもりだったのだろう。そして、葵は、「ナナコといっしょならなんだったってできると、幼い子どものような無邪気さ」で、飛び降りてしまう。

二人の少女の心中未遂で終わる八章に続く、九章では、働き始めたことで夫との関係がぎくしゃくする小夜子が、キッチンでめくっていた雑誌に葵の会社プラチナ・プラネットの広告を見つける。「青」というよりは碧の、水中の珊瑚や魚を写す海の写真を見ながら、「小夜子は暗いダイニングで、そうしていれば、写真の向こう側に

いけるかのように、じつとまぶしい海に目を凝らす。

「もつとずっと遠くに行きたい」と願う葵とナナコ、そして、暗いダイニングで「向こう側」にいけるかのように目を凝らす小夜子は、いまここではないどこかに行こうとしているという共通点を持つ。

また、奇数章は小夜子の視点で語られているので、現在の葵の心境は描かれない。強く明るくたくましい葵の外側だけしかみえない。同様に、偶数章は高校生の葵視点で描かれているので、葵にはナナコの「空洞」が見えない仕掛けになっているのである。

このように『対岸の彼女』は、現在の小夜子にとっての葵が、過去の葵にとつてのナナコのように描かれ、現在と過去を交互に織り交ぜることによって、葵の過去は、小夜子の過去であるかのような錯覚を読者に与えつつ、ずれながらつなげていく展開になっている。

これまで過去の葵の回想部分を読んでいると、葵の過去は、小夜子の過去であるかのような錯覚を読者に与える仕掛けがあると論じてきたが、過去の葵とナナコの間には、現在の小夜子と葵の関係と全く重なるかというところではない。物語は徐々に小夜子と葵のズレを浮かび上がらせる。

自分で企画したチラシ配布で掃除代行の仕事が取れ、働くことに意義と自信を見出してゆく小夜子は、働く女性としての同志である葵に「檣橋さんと一緒にだ、なんだかなんでもできそうな気がする」という。この言葉を聞いて葵は「一瞬真顔で」小夜子を見つめる。なぜなら、これはかつて葵がナナコと家出をしたときに、ナナコに言った言葉（「あたし、ナナコと一緒にだなんでもできるよ

な気がする」と同じだからだ。このあとナナコと葵はビルの屋上から飛び降り、心中未遂事件を起こしたのは先に述べたとおりだ。

この次の一章で、小夜子は葵に誘われ温泉旅行に出かける。読者は、かつて葵を誘ったナナコのように、今度は小夜子を誘った葵が、ナナコのような「空洞」を抱えて、温泉旅行に小夜子を誘ったと推測するだろう。しかし、葵と小夜子の温泉旅行は、ナナコと葵の家出の結末と同じにはならない。

葵は小夜子に、温泉に泊まって、明日は浜松に行つて、その次は名古屋に行こうと提案するが、小夜子は葵の顔を見ながら、「私はどこにいこうとしているのだろうか?」「浜松より名古屋より大阪よりもっと遠くに、もう二度と帰つてこれないとなんかんな方向に、足を踏み出そうとしているのではないか」と疑問を覚える。小夜子は、独身で経済的に自立している葵を見てると夫と別れて、あかりと暮らせるのではないか、という「錯覚」を覚えてしまったのだらう。しかし、そうした「決定的な事態」に発展する前に「愚痴でも不満でも疑問でも、修二と向き合つて吐き出さなければならぬのではないか」と思いいたり、家に帰ることを葵に告げる。

この場面では、ワーキング・マザーである小夜子と、独身キヤリア・ウーマンである葵のズレが顕在化する。温泉に泊まらないという小夜子に「どうして? 宿代なら私が持つから気にしないでよ」と「ざらり」という葵、娘の着替えを気にする小夜子に「平気だよ、そんなの。着替えなら買えばいいじゃん」という葵に、小夜子は違和を感じる。自分の時間とお金を自由に使える独身の葵に対して、夫と娘のことも考えなければいけない小夜子——家庭を持つ小夜子と働く女性である葵の間には、時間感覚、金銭感覚のズレがある。

しかし、そうしたズレ以上に、二人の間には決定的な隔絶が生まれる。小夜子が何気なく言った、「私もこのまま浜松でも大阪でもいっちゃいたいけど、逃げたつてしかたないしね」という言葉を聞いた葵からは、「顔に残っていた笑みが、顔の表面からなだれ落ちるように消えて」ゆき、「ぼつかりと空洞のような無表情」が広がる。小夜子は夫やわずらわしい日常から「逃げる」という意味で言ったのだが、葵はナナコとの過去の事件を、小夜子から指摘されているように感じたのだ。葵は誰かが小夜子に過去の心中未遂事件、それも「女子高生、異常性愛のちにたどりついた飛び降り心中」と噂に尾ひれがついてスキャンダルとなった事件のことをしゃべつたと勘違いしたのだ。そして、「私があなたに何をすると思っているの?」と、小夜子にとっては意味不明の内容を問いかける。

これまで、ナナコ―葵、小夜子―葵の二つの物語がバラレルに進んでいたのが、ここに来てその構造は消え、次の二章からは、表面的には気丈にふるまっているが、学校でのいじめ、心中未遂事件という過去のトラウマや、現在の会社の経営の苦労など、葵の「空洞」の部分が、小夜子に見える形で立ち上がつてゆく。

『対岸の彼女』において、登場人物の三人は「いじめ」体験に端を発した「空洞」を抱えている。そしてその「空洞」は連鎖する。ナナコは貧困からのいじめによって心に「空洞」を抱え、葵はナナコの心の「空洞」に共鳴して心中事件を起こす。小夜子も学生時代のいじめによって、人間関係をうまく築けない。そして、物語の最後は、その小夜子が葵の「空洞」に向き合い、葵の「空洞」を埋めるため「掃除」をするのである。

ある日、葵は突然、清掃業務から撤退するという。葵の会社はも

とも旅行会社だったのだが、葵の思い付きで清掃業務を始めた経緯がある。旅行会社の社員が三人も退職し、清掃業務をカットしようというのだ。小夜子が主体的にかかわって徐々に顧客を獲得してきた矢先だった。そうした葵の一方的な決断に対して腹を立てた小夜子は、「自殺未遂のあと。結局、どうなったの」と、葵に悪意を向ける。不決行に終わった葵との温泉旅行のあと同僚から、噂話として、葵の過去の心中未遂の話聞いたのだ。小夜子もそのニュースは記憶していた。

小夜子は、葵との温泉旅行の後から、いじめにつながる「女子高生みたい」な関係ではない関係を模索していた。また「働くママバッシング」をするママ友に対しても、毅然とした態度を取ることができるようになった。その理由は育児をしながら働くことの充実感と自信を得たからである。だから、清掃業務を一方的に放棄するという葵に腹を立てたのだ。しかし、このことをきっかけに、葵の心の「空洞」を小夜子のはぞくことになる。

4. おわりに——心の「空洞」を「掃除」する

「あのあと——」とはじまる一四章は初めて葵の視点で語られる。事件後、一度だけナナコと会うことができたが、引越したナナコからは約束した手紙が来ない。大学に進学するが、人と親しくなることを恐れる葵は、人間関係を「バリア」を張る。大学三年生の時、世界旅行に出かけるが、ラオスで親しそうに近づいてきた男性に、脅されて金銭をとられてしまう。人間不信をさらに深めてしまう出来事であるが、逆に葵は人間を信じようと決心する。それは、「ナ

ナコがいけないこの世界のほかに、見知らぬ人と笑いながら言葉を交わすナナコが存在する世界だつてある」と信じたいからだ。

こうして、葵は自ら事業を立ち上げ、清掃業務に応募してきた小夜子と出会う。小夜子とともに「もの見事に汚れた部屋」を掃除しながら、葵は高校時代に伊豆のペンションでナナコと掃除のアルバイトをしていたことを重ねて思い出す。部屋を磨きながら、「不安がゆっくりと溶けていく」のを感じる。

自分がやりたかったのはこういうことだった。立ち止まる前にできることを探し、へとへとになるまで働き続け、その日の終わりに疲れたねと笑顔でだれかと言いかうこと——高校生の自分が待ち焦がれていた未来はそういう日々の先にはかあり得ないのかもしれない（後略）。

そして、葵にとつて、小夜子は単なる従業員ではなく「おんなじ丘をあがっている」同志と思っていた。その小夜子から「自殺未遂のあと。結局、どうなったの」と心をえぐる言葉をぶつけられたのだ。

葵が自らの視点で、心中未遂事件後を語る一四章は、同時に、「自殺未遂のあと。結局、どうなったの」という小夜子の問いかけに対して、自らの心中事件を「今までずっとそうしてきたように、おもしろおかしくかいつまんで」小夜子に話している間の、葵の心情描写にもなっている。

ナナコとともに「どこへいこうとしていたのか」を模索して、一気にビルから飛び降りる先に未来はなく、清掃業務のように目の前の汚れを一つ一つ落としてゆく作業の先に未来があると、小夜子と掃除をしながら葵は悟ったのだ。

『対岸の彼女』の中で描かれる「掃除」は、小夜子たち「主婦」のする家事としての掃除、高校生のナナコと葵が夏休みにペンションでしたアルバイトとしての掃除、そして、葵の会社が経営する家事代行としての清掃業務というように、同じ「掃除」でもそれぞれ持つ意味が異なる。「主婦」のする家事としての掃除は賃金が支払われないアン・ペイド・ワークである。家事代行としての清掃業務は、忙しい女性に代わって掃除をするペイド・ワークである。その仕事にワーキング・マザーである小夜子が関わる。当初、主婦なのに汚くしている顧客の部屋に顔をしかめていた小夜子であったが、仕事に自信を持ち始めると、いくら汚れた台所であっても、「以前のような嫌悪もとまどい」も感じず、「ほかの業者ではなく自分自身に掃除をさせてほしいと小夜子は強く」思う。家事代行は女性が女性を支えるエンパワーメントの業務でもある。小夜子は、掃除という業務を通じて、自分と同じような母親をエンパワーメントすることに意義を見出したといえる。

しかし、最後にもう一つ掃除をしなければいけないところがあった。それは葵の部屋である。その部屋は、事業に躓いて、荒れ果てた部屋にひきこもっている葵の心の「空洞」そのものだった。「雑巾を手にうろつきまわっても、磨き忘れたところは家のなかにあるのではない」と悟った小夜子は、最終章で、葵の部屋へ再雇用を申し出に行く。

そこで、葵は小夜子に、会社への復職の条件として、一日で葵の汚れた部屋を掃除する条件を出す。承諾し、掃除を始めた小夜子は、そこで、高校時代、ナナコが葵に出したたわいもない手紙を見つける。それを読むと「見たことのない景色が、実際の記憶のよう

に色鮮やかに」浮かぶ。先に、『対岸の彼女』は現在の小夜子と過去の葵を混同させる語り方をあえて採用していると仮説を述べが、最後の場面において、二人の、ナナコを含めれば三人の過去と現在と未来が重なる。

川沿いの道。生い茂る夏草。制服の裾をひるがえし、陽の光に髪を輝かせ、何がおかしいのか腰を折って笑い転げながら、川向うを歩いていく二人の高校生。彼女たちはふとこちらに気づき、対岸に立ち尽くす高校生の小夜子に手をふる。ちぎればかりに手をふりながら、何か言っている。小夜子も手をふりかえず。(中略) 指の先を目で追うと、川に架かる橋がある。二人の女子高校生は小夜子に手招きし、橋に向かって走り出す。対岸の彼女たちを追うように、橋を目指し小夜子も制服の裾を躍らせて走る。川は空を映して、静かに流れている。

タイトルである『対岸の彼女』は、ナナコと葵から見た小夜子、小夜子から見た葵とナナコのことを指すが、それぞれの岸辺にいる少女たちは、それぞれいじめによる人間関係への不信感を経験している。いじめられても、学校に「大切なものはない」というナナコだったが、心の「空洞」を埋められず、葵と心中未遂を起こす。葵も「ひとりでもこわくないと思わせてくれる何か」、つまり仕事に出会えたが、「ひとり」でやることに限界を感じている。

三人の女性たちは、それぞれ心に「空洞」をかかえ、離別や決別というすれちがいを経験する。しかし、すれちがいがながらも、「もつとずつと遠くに行きたい」と願う葵とナナコ、そして、暗いダイニングで「向こう側」にいけるかのように目を凝らす小夜子は、いまここではないどこかに行こうとしているという点では同じ方向

を向いている。

「どこへどこへとしていたのか」「何をしたいのか」——という共通の思いを持つ三人は、同じ川岸の両側をそれぞれ歩いている「対岸の彼女」たちである。

『対岸の彼女』は、小夜子という「専業主婦」が、ワーキング・マザーとなり、労働の意味を見出し、葵の心の「空洞」を「掃除」でエンパワメントするまでを描いた小説である。そして、現在の小夜子と過去の葵を混同させる話法によって、二人は限りなくシンクロしてゆく。このあと、葵は、会社を立て直すだろう。その会社に、仕事のパートナーとして小夜子も参画するだろう。物語の先はわからないが、「掃除」という労働によって、「独身女性」と「主婦」という異なる立場、境遇に置かれた「対岸」の存在が、一つの仕事を可能にする示唆されていると考える。小夜子の空想の中で、対岸にいる小夜子と葵が向かっている「橋」が、そのことを象徴しているのかもしれない。

しかし、『対岸の彼女』というタイトルに示されるように、女性たちはシンクロしながらも、なれあうのでもなく、つるむのでもなく、癒着するのでもなく、ただ同じ方向を向いて走っている「対岸」の「彼女」としてエンパワメントすることが、その未来に見えてくる小説である。

(1) 榎本正樹「角田光代の現在―『庭の桜、隣の犬』『対岸の彼女』

『文藝』四四巻一号、二〇〇五年春、一〇八頁

(2) 野崎敏「BOOK REVIEW 書評『対岸の彼女』角田光代 友情

はいつまで力を保てるか 丹念な描写で迫る」『論座』、一一八

号、二〇〇五年三月、三二八頁

(3) 大杉重男「対岸の八〇年代 角田光代論」『エリイカ』四三巻五号、二〇一一年五月

(4) 森絵都「解説」、文庫本『対岸の彼女』文春文庫、二〇〇七年一〇月、三二九―三三三頁

(5) 北野誠「ケアからエンパワメントへ——人を支援することとは意思決定を支援すること」ミネルヴァ書房、二〇一五年四月、一頁

(6) 松本園子・永田陽子・福川須美・堀口美智子『実践家庭支援論(第三版)』ななみ書房、二〇一七年二月、二六頁

(7) 杉浦浩美「保育士養成と三歳児神話——内面化された家族規範」『埼玉学園大学紀要人間学部篇』第一八号、二〇一八年一月、一八四頁

(8) 杉浦浩美「保育士養成と三歳児神話——内面化された家族規範」『埼玉学園大学紀要人間学部篇』第一八号、二〇一八年一月、一八五頁

(9) 女性の「主婦化」については、落合恵美子「21世紀家族へ(第三版)」(有斐閣、二〇〇四年四月)を参照。

(10) 角田光代「八日目の蟬」については、光石亜由美「(母になろう)とする母子たちの物語——角田光代『八日目の蟬』」『ケアを描く 育児と介護の現代小説』(七月社、二〇一九年三月)を参照してほしい。

(11) 直木賞の選者の一人である平岩弓枝は「自由奔放に行きつ戻りつしているように緻密に計算されている構成のおかげで作品

の流れがよどむことはない」(「対岸の彼女」を推す)「第一三
二回直木三十五賞決定発表」『オール読物』六〇巻三号、二〇
〇五年三月、二三頁)と構成のうまさを評価している。他の選
評でも「構成の妙」(阿刀田高)、「水平線を見せるかのような
構成は実に鮮やか」(林真理子)など評価は高い。

(12) 注(1)に同じ。

(みついし・あゆみ)